

ぬかたこふんぐん 糠田古墳群（第1次） 鴻巣市

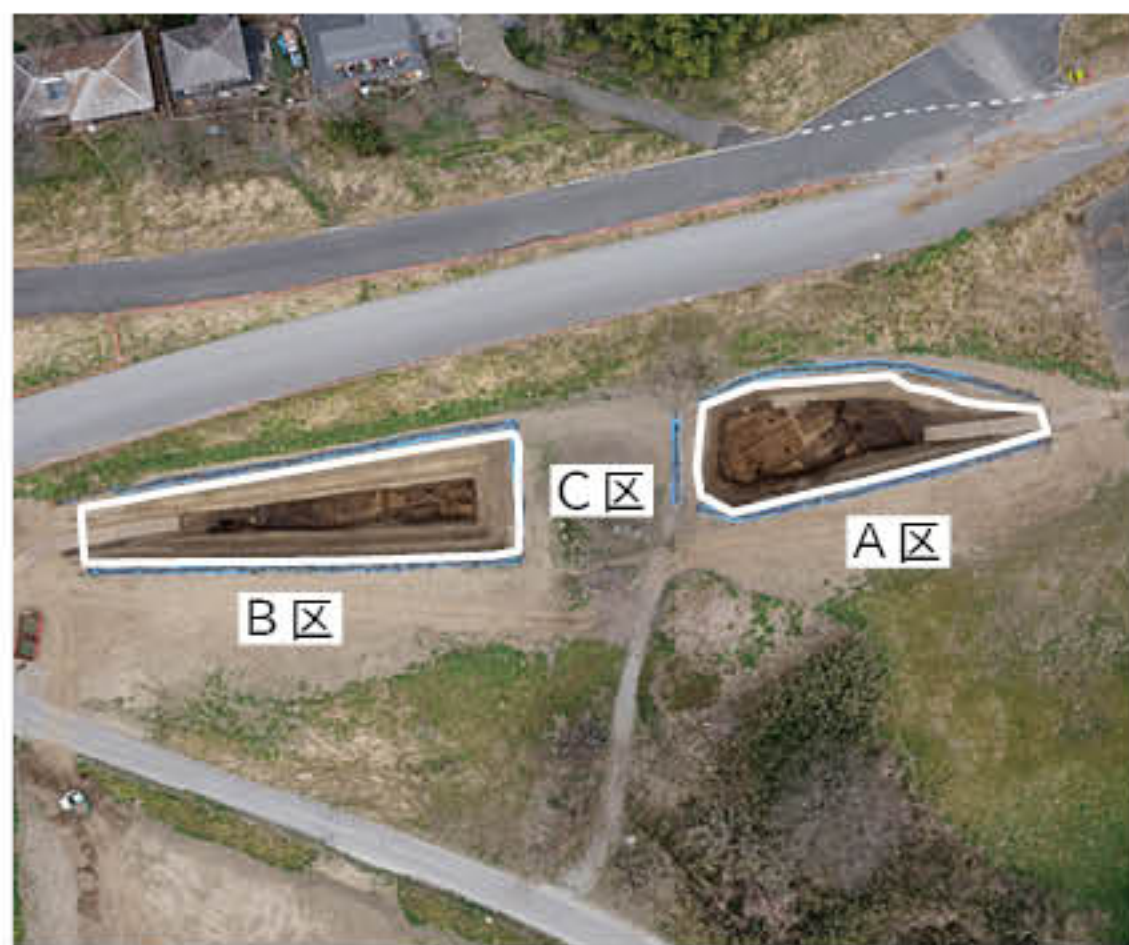
「立地と環境」

糠田古墳群は、JR高崎線北鴻巣駅から南へ約2・6kmの鴻巣市糠田地先に所在する。

遺跡は大宮台地の西端に位置し、南側には荒川が東流している。遺跡周辺の表層は、沖積土で覆われており、大半が寛永6年（1629）に荒川の瀬替えが行われた以後に堆積したものと考えられる。

遺構検出面の標高は、約15mである。

遺跡の周辺は、古墳時代になると遺跡数が急激に増加し、赤台遺跡、中三谷遺跡、生出塚遺跡などの集落跡が知られている。中でも生出塚遺跡は、埴輪窯跡、工房跡、粘土採掘坑が検出されており、埼玉県内有数の埴輪製作遺跡である。



遺跡全景

奈良・平安時代の遺跡数は減少する。中世になると、周辺には箕田地区の箕田館跡や糠田地区の安達館跡のほか、大間地区の源経基館跡等の城館跡がみられる。江戸時代には河岸が設けられ、荒川を往来する舟運の拠点のひとつとなり、「糠田の渡し」として荒川を渡る人々が往来していた。

「発見された遺構」

調査区は中央を次年度以降に調査するため、中央を残し下流側をA区、上流側をB区とした。次年度以降調査する部分は、C区とした。

A区

古墳時代の遺構が検出された。検出された遺構は、竪穴住居跡5軒、井戸跡1基、溝跡2条、遺物包含層1箇所である。

住居跡の時期は、いずれも古墳時代前期である。第2号住居跡は、1辺が約8mの隅丸方形の大型住居である。炉跡が中央から2基検出された。出土した遺物は、土師器高坏、台付甕、甕、壺、ミニチュア土器、土製品の土錘、土玉などである。重複して第8号、第10号住居跡が検出され、古い順から第10号、第8号、第2号住居跡の順に構築されている。

井戸跡は1基検出された。第5号溝跡の埋没後に掘られており、時期は6世紀頃と考えられる。検出された2条の溝跡のうち、第5号溝跡の覆土中層からは、榛名山ニッ岳沢川テフラ（略称：エューエフ）が確認された。時期は5世紀と考えられる。

このほか西半分の範囲から、遺物包含層が検出された。包含層からは、古墳時代前期の土師器高坏、台付甕、壺の破片が多量に出土した。

B区

B区は遺構面が二面あり、第一面は中世、第二面は古墳時代の遺構が検出された。

中世（第一面）

土壌6基、溝跡3条が検出された。溝跡の主軸は南北方向で、中世の陶器片が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

古墳時代（第二面）

竪穴住居跡5軒、土壌1基、井戸跡1基、溝跡3条が検出された。竪穴住居跡は、いずれも古墳時代前期であった。第7号住居跡からは土師器壺、甕がまとまって出土した。第9号住居跡からは土師器甕が出土した。

井戸跡は1基検出された。第6号溝跡と重複しており、A区の井戸跡と同様に溝跡が埋没した後に掘られたものである。覆土上層から、6世紀代の円筒埴輪の破片も出土した。

溝跡は3条検出され、覆土中から4世紀の土師器片が少量出土した。

「まとめ」

糠田古墳群は、これまでの分布調査で6世紀前葉の埴輪片が採集されていたため、当初はこの時期の古墳が検出されると考えていた。しかし、調査で確認した遺構の主体は4世紀代で、今回の調査区は、古墳時代前期の集落跡であることが分かった。また、自然堤防上に立地する

と考えられていたが、古墳時代の遺構はローム台地上に構築されていた。古墳時代の住居跡は、重複も多く、頻繁な建て替えが行われたことがうかがえる。検出された溝跡については、区画施設の可能性がある。溝跡や井戸跡からは、6世紀代の埴輪片が出土しており、付近に古墳が存在すると思われる。

A区壁面の土層観察では、古墳時代の遺物包含層の上層に盛土が認められた。この盛土はC区に続いており、古墳の墳丘の可能性が考えられる。次年度の調査で明らかにしていきたい。中世では、小規模な土壌と溝跡が検出されたのみであった。調査区の北側には、鎌倉時代の館跡という伝承が伝わる放光寺があるが、直接関連した建物跡や堀跡などは検出されなかった。

糠田古墳群は、これまでの分布調査で6世紀前葉の埴輪片が採集されていたため、当初はこの時期の古墳が検出されると考えていた。しかし、調査で確認した遺構の主体は4世紀代で、今回の調査区は、古墳時代前期の集落跡であることが分かった。また、自然堤防上に立地する

- 所在地
鴻巣市糠田地先
- 実施期間(事業者)
令和4年10月～令和5年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
1288.71㎡
- 遺跡の種別
集落跡
- 主な遺構
古墳(住居跡10・土壌1・井戸跡2・溝跡6・炉跡1・遺物包含層1)
中世(土壌6・溝跡4)



第2号住居跡

ひがしほんじょう 東本庄遺跡（C地点Ⅱ次）本庄市

「立地と環境」

東本庄遺跡は、西側に位置する大久保山の丘陵裾部に連なる微高地上に立地し、標高は約54.9mである。

遺跡の周辺には、男堀川に沿って、東五十子遺跡、久下前遺跡、久下東遺跡、七色塚遺跡、笠ヶ谷戸遺跡などの古墳時代の集落跡が分布する。奈良・平安時代では、本庄台地に沿って諏訪新田遺跡、御堂坂遺跡などの集落跡が分布している。中世の遺跡は、大久保山の丘陵上に栗崎館跡、北堀本田館跡、本庄台地上に東五十子遺跡、東五十子赤坂遺跡、東五十子城跡などが分布している。遺跡の北東約200mに東本庄

稲荷神社が位置している。この神社は、本庄市史によると庄氏が東本庄館を構えた際に創建したという伝承が残されている。

「発見された遺構」

調査は、令和3年度から継続している。今回の調査で発見された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡14軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡、土壇、溝跡、中世の土壇、井戸跡、溝跡、炉跡、ピット、かわらけ溜りなどである。

古墳時代

前期から後期にかけての竪穴住居跡が、14軒が検出された。分布の中心は、調査区西半分の中央部にあり、なかでも第23号住居跡からは、甕・高坏・甕・甕・甕・坏・ミニチュア土器等、大量の遺物が出土した。

奈良・平安時代

竪穴住居跡28軒、土壇7基、溝跡2条が検出された。竪穴住居跡は、調査区全体から28軒検出された。そのうち1軒が、奈良時代の竪穴住居跡であった。東壁にカマドを設けた平安時代の第7号住居跡からは、緑釉陶器・須恵器坏・蓋、土師器台付甕・坏等が出土した。出土した緑釉陶器の合子は、出土例が少ないもので特に注目される遺物である。

中世

調査区東側を中心に、土壇117基、井戸跡11基、溝跡18条、炉跡13基、ピット多数、かわらけ溜り5箇所が検出された。そのうちかわらけ溜りは、いずれも浅い掘り込みを伴い、かわ



第5号かわらけ溜り 遺物出土状況

らけを主体とした大量の遺物が出土した。

第5号かわらけ溜りは、範囲6m×2mで、かわらけを主体として遺物が約700点検出され、瓦質土器の火鉢や片口鉢、陶器大皿、碗、甕、青白磁碗、石製の硯等も含まれていた。

第19号溝跡は堀跡と考えられる規模の大きなもので、断面形がV字状で、上幅約5m、長さ約35m、深さ約1.8mで、調査区を南北に縦断していた。

「まとめ」

今回の調査では、古墳時代前期から後期の竪穴住居跡が調査され、新たに古墳時代の集落が

営まれていたことがわかった。平安時代の第7号住居跡から検出された、緑釉陶器の合子は、愛知県の猿投窯で生産されたと考えられる。同様の器形は、中国の越州窯で認められている。合子の出土例は少なく、京都市に次いで2例目となる貴重な発見となった。

また、中世で検出された堀跡と考えられる溝跡は、本庄市の調査成果の堀跡に繋がるものである。検出された井戸跡、ピット群、かわらけ溜りなども含め、これらの遺構が、館跡を構成していたと考えられる。

これらは、

遺跡が所在する地域に伝承として残る見玉党の庄氏の館である東本庄館の一部と推測され、地域史を解明する貴重な成果となった。



第7号住居跡 緑釉陶器合子出土状況

- 所在地
本庄市大字北堀字東本庄116-1 他
- 実施期間(事業者)
令和4年4月～令和4年10月 (埼玉県)
- 調査面積
2,565.36㎡
- 遺跡の種別
集落跡
- 主な遺構
古墳(住居跡14)
奈良・平安(住居跡28・土壇7・溝跡2)
中世(土壇117・井戸跡11・溝跡18・炉跡13・ピット1005・かわらけ溜り5)

権現遺跡（第1次） 吉見町

「立地と環境」

権現遺跡は、比企郡吉見町久保田に所在する。標高約16mの自然堤防上に立地し、東に荒川、西に市野川が流れる。権現遺跡の西側に二ノ耕地遺跡が位置し、両遺跡の間には横見川が南流する。二ノ耕地遺跡は、平成28年に吉見町教育委員会によって実施され、古代の区画溝跡や中世の井戸跡等が検出された。

また、北東約150mには原遺跡が所在し、吉見町教育委員会によって平成15年度に発掘調査が行われ、最大幅8・2mの溝跡から古墳時代前期の土器が多量に出土した。

西側には、三ノ耕地遺跡がある。平成8年度以降、吉見町教育委員会によって第1～3次



遺跡全景

調査が、令和3年度に当事業団によって第4次調査が実施された。第1次調査では、弥生時代の竪穴住居跡や古墳時代前期の方形周溝墓群および前方後方形の墳墓、古

墳時代後期の古墳が検出された。第2次調査では、縄文時代晩期の水場遺構や同時期の竪穴住居跡、古墳時代前期の前方後方形の墳墓等が検出された。第4次調査では、古代道路の側溝と考えられる溝跡が検出された。

「発見された遺構」

今回の調査では、縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺構が発見された。調査区西端は、後世に1m以上掘削されており、遺構は検出されなかった。

縄文時代

ピットを1基検出し、縄文の深鉢形土器の底部が正位の状態出土した。時期は後期と考えられる。

古墳時代

竪穴住居跡1軒、土壇3基、井戸跡5基、溝跡1条、ピット23基が検出された。



第1号住居跡

竪穴住居跡は掘り込みが浅く、床面から炉跡が検出された。僅かに出土した遺物から、前期と考えられる。

第6号土壇は、一辺約1・4mの方形に近い平面形で、前期の壺や高坏が出土した。

井戸跡は、調査区東側から5基検出された。直径約0・55mから0・75mで、深さ1・3mから1・9mである。出土遺物から、3基が前期、2基が後期と考えられる。

溝跡は1条検出された。北端からは、前期の土器がまとまって出土した。

奈良・平安時代

井戸跡を1基検出した。直径約1・0mで深さは2・0m以上あり、古墳時代の井戸跡より規模がやや大きい。覆土から須恵器片が出土した。

その他の時代

ほかに調査区からは、遺物などが検出されず時期を特定できなかった土壇3基、ピット12基が検出された。

「まとめ」

権現遺跡第1次調査では、縄文時代、古墳時代、平安時代の遺構・遺物が見つかった。

縄文時代は、ピットが検出された。ピット内からは、後期の深鉢形土器の底部が検出された。隣接する三ノ耕地遺跡では、縄文時代の水場遺構が検出されている。

古墳時代は遺跡の主体となる時期で、狭い調査区から前期の竪穴住居跡、井戸跡、溝跡が検出された。後期の井戸跡も検出されて、周辺に住居跡が存在する可能性が高い。

奈良・平安時代の井戸跡も1基検出され、古



第6号土壇 遺物出土状況

群や後期の集落などが検出されており、横見川流域に形成された自然堤防上の集落と関連することから、その位置を明らかにすることができた。

- 所在地
吉見町久保田地内
- 実施期間(事業者)
令和4年6月～令和4年8月
(埼玉県)
- 調査面積
400㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
縄文(ピット1)
古墳(住居跡1・土壇3・井戸跡5・溝跡1・ピット23)
奈良・平安(井戸跡1)
時期不明(土壇3・ピット12)

二ノ耕地遺跡（第2次）吉見町

「立地と環境」

二ノ耕地遺跡は、比企郡吉見町久米田に所在する。標高約16mの自然堤防上に立地し、東に荒川、西に市野川が流れる。二ノ耕地遺跡の東側に権現遺跡が位置し、両遺跡の間を横見川が南流する。

二ノ耕地遺跡第1次調査は、平成28年に吉見町教育委員会によって実施され、奈良・平安時代の溝跡、中世の井戸跡やピットが検出された。



第1地点 遺跡全景

西側には三ノ耕地遺跡が隣接し、吉見町教育委員会によって第1～3次調査が、令和3年度に当事業団により第4次調査が実施された。

二ノ耕地遺跡の南東約2.5kmの自然堤防上には、永和2年（1376）の銘を持つ宝篋印塔がある。伝大串次郎重親塔と言われており、宝篋印塔の銘文年代と大串次郎重親との乖離が指摘されていたが、大串次郎重親の生存期間と時期的に重なる12世紀後半の白磁四耳壺と渥美焼大甕が、塔の地下から出土している。

「発見された遺構」

今回の調査は、地点が2箇所に分かれており、便宜的に西側を第1地点、東側を第2地点と呼称した。

第1地点

第1地点からは、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世以降の遺構が検出された。

縄文時代

縄文時代の遺構は、後期のピット2基が検出された。後期の土器片が少量出土した。

古墳時代

竪穴住居跡1軒、土壇9基、井戸跡7基、溝跡6条、ピット13基が検出された。

第1号竪穴住居跡の床面は削平され、方形周溝状の掘方が確認された。出土遺物から、時期は後期（7世紀後半）と考えられる。

第29号土壇は前期の第18号溝跡に壊されており、古墳時代前期またはそれ以前の遺構と考えられる。

第3号溝

跡は幅1m前後で、緩く弧状に屈曲する形状で、前期から中期頃の土師器が少量出土した。古墳または円形周溝墓の溝跡の一部である可能性も考えたが、明らかにすることはできなかった。第18号溝跡は前期の溝跡で、ほぼ直線的に掘削され、調査区を斜めに横断していた。覆土上層から数m間隔で壺や高坏、台付甕などの土器がまとまって出土した。

井戸跡は7基検出され、いずれも径は小さく、深さは1mを超えていた。

奈良・平安時代

竪穴状遺構1基、土壇22基、井戸跡9基、溝跡3条、ピット11基が検出された。

竪穴状遺構は、やや歪んだ長方形で、西壁に突出部があった。底面は概ね平坦で硬化面が形成されていた。時期は、出土遺物から9世紀後半頃と推定される。

第21号土壇は小竪穴状で出土遺物から、9世紀代と考えられる。

井戸跡は、調査区中央から東側に集中する傾向が認められた。地下水脈により占地に偏りが生じたと考えられる。古墳時代の井戸跡よりも大型であった。

第12号溝跡は直線的に延び、覆土から土師器・須恵器と共に灰釉陶器碗の破片が出土した。遺

- 所在地
吉見町大字久米田地内
- 実施期間(事業者)
令和4年8月～令和5年3月
(埼玉県)
- 調査面積
2,430㎡
- 遺跡の種別
集落跡
- 主な遺構
第1地点

縄文（ピット2）、古墳（住居跡1・土壇9・井戸跡7・溝跡6・ピット13）、奈良・平安（竪穴状遺構1・土壇22・井戸跡9・溝跡3・ピット11）、中世（掘立柱建物跡2・土壇1・井戸跡5・溝跡5・ピット13・柵列跡1・火葬跡1）、近世以降（土壇4・溝跡14・ピット7）、時期不明（土壇6・溝跡3・ピット293）

第2地点
古墳（井戸跡4・溝跡1）、奈良・平安（土壇2・溝跡3・ピット4）、中世（土壇1・溝跡2・ピット25）



第2地点 遺跡全景

物から時期は9世紀後半に位置付けられる。

中世

検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、土壇1基、井戸跡5基、溝跡5条、火葬跡1基、ピット13基である。

第1号掘立柱建物跡は調査区東端に位置する2×2間の、小規模な側柱建物跡であった。また、第2号掘立柱建物跡は3×1間の小規模な側柱建物跡である。

第21号溝跡は中央部南東から北西に向けてやや蛇行して延びる。断面形が箱葉研形の堀で、検出された溝の中で最も規模が大きく、居館の外郭を区画する堀跡の一部となる可能性がある。第21号溝跡の途中からは、内部の区画溝と思われる第28号溝跡が北東方向に分歧し、分歧部からは馬歯（上顎・下顎一対）が礫集中に伴って出土した。北東側からは、掘立柱建物跡2棟、



第24号井戸跡 土器出土状況

井戸跡5基とピット群、火葬跡が検出された。第19号井戸跡と区画溝第28号溝跡との新旧関係は明確に把握できなかったが、井戸跡が新しい可能性はある。南西側には第15号溝跡、第19号溝跡が第21号溝跡と併走して配置されていた。

第21号溝跡から龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、渥美焼甕、常滑焼三筋壺、在地系土器片口鉢などが、第13号井戸跡から高麗青磁碗、龍泉窯系青磁碗、渥美焼甕、常滑焼甕などが出土した。遺物の時期は、平安時代末期から鎌倉時代（12世紀後半から13世紀頃）と考えられる。

近世

近世の遺構は土壇4基、溝跡14条、ピット7基が散在して検出された。

第17号溝跡からは、肥前系磁器碗や京都信楽系陶器の灯明皿が出土した。時期は18世紀から19世紀と考えられる。屋敷の区画溝と思われるが詳細は不明である。

第2地点

第2地点からは、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世以降の遺構が検出された。

古墳時代

井戸跡4基、溝跡1条が検出された。

第24号井戸跡は長軸1.6m、短軸1.1mの平面形が卵形で、深さは最深で1.7mあった。遺物は、土器や木製農具などが出土した。最下面からは瓢形壺の完形品が出土した。このほか、古墳時代前期の台付甕や壺、小型器台、小型高

坏などの土器や、形が板状製品、柄孔四又鍬、鍬柄などの木製品が出土した。

第38号溝跡は、幅2.5から3.0m、深さ0.2から0.6mで、蛇行しながら調査区北東の角から調査区南の谷（横見川の谷頭）に向かって延びていた。古墳時代前期の壺や台付甕、器台、高坏などが出土した。

奈良・平安時代

土壇2基、溝跡3条、ピット4基が検出された。

溝跡は、掘削の結果、第32号溝跡がaからeの5条の溝跡に分かれていたことが判明した。そのうちcからeとした3条の溝跡から、土師器・須恵器の坏や蓋、甕、長頸瓶などが出土した。時期は8世紀後半から9世紀前半である。

中世

土壇1基、溝跡2条、ピット25基が検出された。

第32号溝跡内の5条の溝跡のうち、bの溝跡から、格子状の叩きのある渥美焼甕の胴部、常滑焼甕の口縁部が出土した。時期は、12世紀末から13世紀初頭である。

近世

溝跡3条が検出された。

第32号溝跡内の5条の溝跡のうち、aの溝跡から京都信楽系や肥前系の陶磁器碗、土師質土器の焙烙などが出土した。時期は18世紀である。

「まとめ」

二ノ耕地遺跡第2次の発掘調査では、古墳時代から奈良・平安時代と、中・近世にかけての遺構・遺物が発見された。

中世の遺構と考えられる、第1地点の調査区を東西に延びる第21号溝跡は、やや蛇行してい



第24号井戸跡 出土遺物（瓢形壺）

た。「方形館」が定型化する以前の居館跡の特徴を示す可能性が高い。

遺物は龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗・高麗青磁碗、渥美焼甕・常滑焼甕などの遺物が出土した。特に高麗青磁鉢は、外面に象嵌技法による文様が描かれていた。県内では、出土例が1例のみであることから、極めて貴重な資料が出土したこととなる。

第2地点の調査区北側で検出された古墳時代前期の第24号井戸跡は、上層から、台付甕・壺・高坏・小型器台など10個体を超える土器が出土した。その直下からは木製の四又鍬、鍬柄、農具の柄、板状木製品などが出土した。井戸跡の最下層からは、完形の瓢形土器が1点出土した。井戸跡は、横見川に向かって開く谷頭に位置し、祭祀関連の遺構と考えられる。

以上のように、調査により古墳時代から奈良・平安時代、中・近世にかけて、多岐の時代に亘る貴重な成果が得られた。



遺跡全景

調査区内の地形は概ね平坦で、遺構は調査区北側からその多くが検出された。古墳時代の竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡1棟、ピット7基、平安時代の竪穴住居跡1軒、時期不明の土壇1基、溝跡1条が検出された。

古墳時代の竪穴住居跡は、いずれも古墳時代後期（7世紀前半1軒、7世紀後半から8世紀初頭が5軒）であった。第5号住居跡のカマドの南側からは、完形に近い坏がまとまって出土した。さらに東側約30cm、床面より約10cm上層で、完形の土師器の坏が重なって出土した。第7号住居跡からは、遺物が床面直上から数多く

出土した。大半が土師器の坏であった。ほかに甕や台付甕、高坏の脚部、須恵器の甕、土鍾などが出土した。また、炭化したバラ科スモモ属の核が3点出土した。

第1号掘立柱建物跡は、桁行2間、梁行2間の東西棟の側柱建物跡である。柱穴内から7世紀後半から8世紀初頭の土師器の坏が出土した。

平安時代の第9号住居跡からは、伏せた土師器と正位で須恵器坏が出土した。

「まとめ」

今回の調査区は、遺構確認面が砂礫層で、遺



第5号住居跡

構も砂礫層を掘り込んで構築されていた。神流川扇状地では、砂礫層が堆積している部分があり、調査区がちょうどそこに当たっていたと考えられる。また、カマド内部あるいはカマド付近に、伏せられた状態や重ねられた状態で坏が出土した竪穴住居跡が多く見られた。第7号住居跡からバラ科スモモ属の炭化核が出土した。古墳時代後期の植物利用や食生活を知る、貴重な成果となった。



第5号住居跡 カマド付近遺物出土状況

北稲塚第II遺跡（第2次）上里町

「立地と環境」

北稲塚第II遺跡は、JR高崎線神保原駅の北東約1kmに位置し、標高は約53mである。遺跡は、神流川扇状地の扇端付近の微高地に立地している。

上里町域には、古墳時代から古代にかけての遺跡が多数確認されている。神流川扇状地では、北稲塚遺跡、金久保内出遺跡、清水南遺跡、五明廃寺、中堀遺跡、帯刀古墳群等が分布している。

「発見された遺構」

調査区は、御陣馬川をはさんで南側と北側に2地点に分かれ、南側調査区を第1地点、北側調査区を第2地点とした。

第1地点

調査区内の地形は概ね平坦で、遺構は調査区中央部及び南側から主に検出された。遺構は、古墳時代の竪穴住居跡3軒、土壇1基、時期不明の土壇1基を検出した。

第1号住居跡は、カマドが東壁に設置され、土師器の甕が倒立した状態で袖から出土した。第2号住居跡は、カマドが北東壁に設置され、カマドの燃焼部内や、左袖部付近から、伏せた状態で坏が3個体出土した。

第14号土壇からは、完形の土師器の坏と下半部の欠損した甕が出土した。

第2地点

調査区内の地形は概ね平坦で、遺構は調査区北側からその多くが検出された。古墳時代の竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡1棟、ピット7基、平安時代の竪穴住居跡1軒、時期不明の土壇1基、溝跡1条が検出された。

- 所在地
児玉郡上里町神保原町 1912-1 他
- 実施期間(事業者)
令和4年10月～令和5年3月 (埼玉県)
- 調査面積
1,154 m²
- 遺跡の種別
集落跡
- 主な遺構
第1地点(南側調査区)
古墳(住居跡3・土壇1)、時期不明(土壇13)
第2地点(北側調査区)
古墳(住居跡6・掘立柱建物跡1・ピット7)、奈良・平安(住居跡1)、時期不明(溝跡1・土壇1)